



TITLE:

湖廣熟天下足

AUTHOR(S):

岩見, 宏

CITATION:

岩見, 宏. 湖廣熟天下足. 東洋史研究 1962, 20(4): 527-527

ISSUE DATE:

1962-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148226>

RIGHT:

湖廣熟天下足

かつて加藤繁博士は、『支那に於ける稻作特にその品種に就いて』（東洋學報三一卷一號、のち『支那經濟史考證』下巻所收）の中で、

明から清にかけては湖南の産米が益々増加し、浙西をも凌が
んばかりであった。唐宋の際には「蘇常熟天下足」とか「蘇湖
熟天下足」という諺があつたが、明代になると、「湖廣熟天下
足」というのも現れた。

と指摘された。そしてこの新しい諺は、明末に出来たと思われる
『地圖綜要』という書の中に見出されることを注記しておられ
る。このような諺の出現から、ただちに湖廣の米産額が浙西のそ
れを上廻つたと推定することには問題があると思われ、その點を
考慮して加藤博士も、「凌がんばかり」という表現を用いられた
のであろう。しかし卑見によれば、この諺から判断できるのは、
米産額それ自體の問題であるよりも、他地方への輸出量の問題で
あらうと考えられる。つまりこの諺の成立した前提としては、湖
廣地方から他の地方（ことに揚子江下流地方が主であつたと思わ
れる）への米の輸出量が、非常に大きなものとして世人の注目を
集めていた、という事實の存在が推定できるであらう。このこと
はひいて當時の産業乃至經濟の發展狀況を考える上に、種々の示
唆を與えるものであり、まことに興味深い諺であるといわなけれ
ばならない。そしてその意味からすると、この諺のできた年代を、
もう少し明確に限定することが出来れば好都合である。筆者の氣
附いたところでは、この諺は何孟春の『餘冬序錄』卷五九の筈首、
藩省之職を述べた中に、

其地（湖廣）視諸省爲最鉅。其郡縣賦額。視江南諸郡。所入差
不及。而湖廣熟天下足之謠。天下信之。地蓋有餘利也。

と見えており、この記事はまた記錄彙編に收録された同書の摘抄
にも出ている。『餘冬序錄』の序は嘉靖戊子すなわち七年に書か
れているから、右の記事の書かれた年代も、一應嘉靖七年（一五
二八）を最下限とみなすことができる。しかも序文中に述べられ
たこの書の成立事情から考えると、それよりかなり早く書かれた
可能性もある。また諺として記載されるまでには、それが相當程
度流傳して、しばしば人の口に上せられるようになっていた筈で
あるから、最初言い出されたときからすれば、既に若干の期間が
経過していたであらう。諺の前提となつた事實は、さらにそれに
先立つて存在したわけであるから、湖廣からの米の輸出が、注目
すべき現象となつてきたのは、遅くとも正徳（一五〇六—一二）
ころのことと判断して誤らないであらう。

筆者はさきに『圖說世界文化史大系』一八、中國IVの一六頁
に、この諺が一大世紀前半にできた旨を述べた。それはもちろん
『餘冬序錄』の記載を根據としたわけである。たまたま昨年十一
月、明治大學で開催された東方學會の總會後の晚餐會において、
同席した北海道大學の藤井教授から、右の一六世紀前半という記
述が何を根據とするのかという御質問を受け、『餘冬序錄』に見
える旨をお答えしたのであるが、その際このことをぜひ何かの機
會に發表するようにとの御懇願を受けた。筆者としては、さしあ
たりこの諺と關聯した論文を書く用意もないので、本誌の餘白を
かりてその責をふさぐことにしたわけである。（岩見 宏）